

lesson を徹底的に master すれば、かなり能率よくタイ語の話し言葉を習うことができるであろう。

ただ忘れてならないことは、本書が英語を母国語とする者のために書かれたものであると言う点、および native speaker の指導のもとに教室で使用されることを予想するもので、ほんとうの意味での「独習書」ではないと言う点である。したがって、日本人からみれば説明不足な点とか、あるいは分り切ったことをくどくど説明している点などが目につくのは仕方ないだろう。また、本書を native speaker の助けなしに全くの独習用に使用しても、おそらく大した効果は得られないであろう。この点をよくわきまえ、適当な指導者なりすぐれた録音テープなりがあれば、日本人でも充分使用することができるであろう。

本書をざっと読み通して感じられることは、やはり、アメリカにおける言語教授法の発達と言うことである。一見何でもなさそうな本であるが、実に能率よく憶えるように仕込まれている。ややこしい理論をくどくどと説明するのでもなければ、ただ「慣れる憶える」と言うわけでもない。本書の編集者が、科学的な言語学の知識を身につけた人であることはすぐわかるであろう。しかし、その知識を言語学習と言う実目的のためにうまく利用しており、決して言語学を教えようとはしていない。新しい教授法に対する批判は色々あるだろうが、少なくとも今までのものよりはすぐれていることは事実である。(桂満希郎)

David E. Sopher. *The Sea Nomads, A Study based on the Literature of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. (Memoirs of the National Museum, No.5) Singapore : The National Museum, 1965. x+422 p.

本書は、東南アジア島嶼部沿岸において、家族ごと舟の上に住みながら沿岸を“nomad”のように移動していく生活を送る民の文献的な研究である。従来このような民を呼称するのに Sea Gypsies とか Orang Laut とかを使用することが多かったが、著者はこれら全部を総称する語として“Sea Nomads”を採用する。この海上放浪民に接近して調査するのは極めて困難なことであり、文献資料も旅行記、行政誌などの片隅に思いがけなく見出されるものが多かっただけに、

この文献資料の集成をはかった本書は、大変貴重なものであろう。

内容は5部にわかれている。第1部は、環境条件すなわち生態学的な考察をマレーシア(広義の)における strand, sea について行なっている。環境条件によって(1) Sea Nomads, (2) Strand Folk, (3) Forest People に大きく、“primitive”文化を有する民が三分されることは著者の地理的前提である。

第2部と第3部は、いわば「現代研究」であって、19世紀・20世紀の文献を中心として Nomadic Boat People の記述と比較を試みている。なかでも第2部の各海上放浪民の記述は著者の意図はともかく、本書の中核をなすものであって、情報源、呼び名、分布範囲、経済、文化的特徴などについて、できる限りの情報を集成してある。彼の研究によれば、地域的には、

(1) マレー半島西岸グループ(Mawken, Orang Laut Kappir) (2) 南支那海グループ(a. Riouw-Lingga Arch. & Adjoining Coasts : Orang Laut Pesukuan, Orang Seletar ; b. The Pulau Tujuh : Orang Laut ; c. Bangka, Billiton & Adjacent Coasts : Sekah, Suku Juru.) (3) 北ボルネオ・スールー諸島グループ(Bajaus, Lutangos, Samals) (4) 東インドネシアグループ(Bajaus, Orang Johor, Turijene, Wong Kambang) の4つに大きく分けられる。第3部の物質的・文化的特徴の比較分析は、資料の不完全さにさまたげられて彼の思うように分析されないのは気の毒である。

第4部は、歴史的な概観であって、19世紀以前の資料を、イギリス・オランダ・スペイン・ポルトガルおよび二次資料ではあるが、1500年以前の中国・アラビアの文献も参照している。

以上のような記述・分析比較・歴史的展望を終えてから、結論として、海上放浪民の移動と起源との考察をする。この仕事は、海上放浪民文化の再建設ということを前提としたものではあるが、「文化史再構築」学者の飛び越えた結論というものを持ち出すのではなく、操作できる資料で得られる結論のみを読者に呈示している。リオー・リング、バンカ・ビリトン諸島附近および南西セレベス沿岸の2地域を移動の源となった地域として設定するのも妥当な帰納といえる。

問題の焦点は、文化接触、文化変容ということにしばられそうであるが、著者が最後のページで僅かに言

及している retrogression の側面は、海上放浪民という比較的孤立した生活を送る民の場合もっと注意が払われても良かったと思う。類似点を求めるのに急なあまり、独立の innovation ということも見落されがちである。また、著者は何の説明もなく、high, middle, primitive cultures ということばを頻繁に使用しているが、これらの相違について説明が欲しいものである。

なお、この論文は、1954年にカリフォルニア大学（バークレイ）へ博士（Ph. D.）論文として提出されたものである。（前田成文）

John Bastin & R. Roolvink (eds.) *Malayan and Indonesian Studies, Essays presented to Sir Richard Winstedt on his Eighty-fifth Birthday*. Oxford Univ. Press, 1964. xii + 357 p.

マラヤにおいて、「最後のそして最も偉大な」(Bastin) 英国植民地学者の、リチャード・ウィンステッド卿の85才の誕生日（1963年）を記念して、彼に献梓された19の論文集である。2人の編者は、かつてマラヤ大学の歴史科およびマレー研究科の教授であったが、現在は各タイギリスとオランダに帰っている。

ウィンステッドの著作活動が、言語・文学・歴史・経済・工芸・法律・宗教と、音楽以外のマレー文化の殆んど全域を覆うものであったように、本書も執筆者の国籍・専門分野ともに多種多忙で、彼の面目を躍如とさせている。

バスティンの巻頭の「序」と Zainal-Abidin b. Ahmad の巻末のマレー語による「マレー研究におけるリチャード卿の貢献」によって、ウィンステッドの業績を知ることができる。但し、書物の出版年代等両者の間に不統一があり、ウィンステッドの“A History of Malaya”の日本語訳として太平洋協会の「マライ史」と野口勇訳の「マレーの歴史・自然・文化」を掲げているが（p. 11）、後者は、ウィンステッドの編集した1923年の Malaya の訳ではないか。

古代史に関しては、フランスの G. Coèdes がスマトラのパレンバンに Kedukan Bukit 碑（Sri Vijaya 朝）の再解釈と、カリフォルニア大の Paul Wheatley のマレー半島の古代史を、地域名の正確な identifi-

cation という点から問題を提供している。更にマラッカが海港として栄える以前の東南アジアの経済史をひもとく鍵として、クラ海峡の Takuapa の問題を Alastair Lamb（マラヤ大学）が扱っている。

マラヤの近代史というと殆んど、15、6世紀以降から敘述されるが、このカテゴリーに入る論文は7つを数える。Wang Gungwu（マラヤ大学）は、初期マラッカの歴史を中国史料から検討し、1403-5の中国マラヤ関係の始まりを説く。C.R. Boxer は、英語文献の少ない、1629のアッチェ人のマラッカ襲撃に光を投げるポルトガル資料を3つ英訳紹介の労をとっている。D.K. Bassett（マラヤ大学）は、18世紀後半のマレー半島を、英国の商業戦略的関心から見る。英国の統治に関しては、C.M. Turnbull と Emily Sadka との2つの論文がある。バスティンは、往々マレーシア人はウィンステッドの歴史視点は受け入れられず、マレーシアの歴史はマレーシア人の手でと主張するが、subject-matter に関する限り、ウィンステッド程、マレー人の視点に立ってマラヤの歴史を解釈したものはないではないかと強調する。そして、マラヤ近代史に歴史上の実在人物のパーソナリティの研究に欠けていることを鋭く指摘して、今後のマラヤ歴史研究の方向を示唆している。C. Skinner は、19世紀のマラヤ、タイ関係理解の為に、バンコックに残っている1839年の Kedah letter の紹介をしている。

ウィンステッドへのこの論文集の中であって特異なのは、L.A.P. Gosling の現地調査に基く Trengganu 州の Baba Chinese の移動と同化とを追跡した論文と、C. Geertz のバリ島における最近の宗教的变化（Internal Conversion）とを扱った論とであろう。

言語・文化に関しては6つの論文がある。マレー編年史の起源と本質とを2人のオランダ人学者が各々論じている。A. Teeuw と P.E. de Josselin de Jong である。R. Roolvink, P. Voorhoeve, C. Hooykaas などの大家も各々文献校訂をしている。インドネシア文学専門の A.H. Johns は、Amir Hamzah を、その詩的生長発展過程を追いつつながら「マレーの王子であってインドネシアの詩人」という風に位置づけている。

多くの Festschrift がそうであるように、全体としての統一は無いが、一つ一つの論文は各々の専門家にとって参考になろう。（前田成文）